

VII. 現代における宣教の挑戦と課題

1. 「宣教パラダイムの転換」

序論的に、ボッシュの「宣教パラダイムの転換」を概観する。ボッシュは南アフリカの宣教師を務めた後、宣教学において指導的なスポークスマンとして活躍したが、1992年自動車事故で亡くなった。彼の役割は WEF と WCC の橋渡しであり、その発言は双方から重要視された。本書は彼の多くの著作の集大成であり、多くの神学校で宣教学の教科書として用いられている。原題は Transforming Mission (変容する宣教、または変容させる宣教) である。彼の前提は「二千年に亘る教会の宣教観は、その時代々々の課題や挑戦によって変わってきているし、同時に宣教が時代を変える」というダイナミックなものである。「私は宣教パラダイム(宣教における思考と行動の枠組み)転換という思想の助けを借りて、二千年に亘るキリスト教宣教の歴史の間に、宣教を巡る理解と実践が変化した事を明示したいと思っている」(P. 11) との著者の言葉が邦題の基となった。その変化の過程は終わっていないと彼は信じ「宣教とは現実を現状のまま受け入れる事を拒み、それを変容する事を目指す我々の信仰の一局面である」(同上 P. 12) と言う。

本書の意義は、英雄的な宣教観に対して「時代の変化」という事実に向き合う事を迫っている点にある。変化の事実を目を瞑り、ある時代の考えを不変の真理と思いつつも危険は、保守的な信仰者には大きい。ボッシュは聖書の編纂から始まって教会歴史の長きに亘る変容を、克明に生き活きと突きつける。ただ、ボッシュの聖書観は批評学的な要素が強く、それが聖書時代の宣教理解に影響を与えている事は見逃せない。それ以後の宣教理解についても「聖書信仰」的な立場から見ると、可成り批判的なので受け入れ難い点が多いが、彼の客観的な物の見方は参考となる。

2. ポストモダン時代の特色と挑戦

- ・ **ポストモダン時代の到来**: 15 世紀のルネッサンス、16 世紀の宗教改革、17 世紀の産業革命、18 世紀の諸市民革命を経て生まれた「近代」の特色は、科学の発展に基づく進歩の思想、人間理性への信頼、社会の発展への希望、人間の創造力への信仰を共通の特色としていた。しかしその楽観主義は、戦争、環境破壊、精神的・道徳的な荒廃からくる深刻な疑問を生んだ。
- ・ **ポストモダニズムとは?**: ポストモダニズムとは「過去数世紀に渡って西洋思想と社会生活を支え続けて来た諸原理や諸前提に懐疑的な態度を取る広範な文化運動」(ポストモダン事典、280) と定義される。その特色は①科学の絶対性への懐疑:②「客観的な知識」への疑い:③著しい個人主義:④反権威主義、脱統制化、脱中心化:⑤環境破壊、精神的・道徳的荒廃の自覚と諦め:⑥著しい個人主義、反権威主義、脱統制化が導く相対主義:⑦エンターテインメント中心:⑧情報化による知識の共有と権威の水平化:⑨客観的原理よりも主観的感性の重視:⑩教会と世の隔絶。現代をポストモダンという一語で括るのは乱暴との批判を浴びつつも、時代の特徴を挙げるとそこに共通的な流れを見る。ステッツァーはいう「ポストモダン文化とは人々がその

中で泳いでいる水の様なもの。福音が輝くべき文化という窓である」と。

3. **ポストモダンに相応しい伝道方法**：伝道の内容と姿勢は時代によって変わらないが、その方法は大きく変わり得るし、変えねばならぬ。それは柔軟性、相手への思いやりの姿勢である。「私は誰に対しても自由ですが、より多くの人を獲得する為に、全ての人の奴隷となりました」(1 コリ 9:19-23)と語ったパウロが 21 世紀に生きていたら、私達の伝道方法をどう評価するだろうか。「伝道は方法ではない、祈りと断食なのだ」という精神論も一面の真理だが、全部ではない。方法論も大切である。ステツァーは、教会のあり方として①情報化社会の利用；②人々のニードと関心からのアプローチ；③交わりを通しての心の癒し；④福音の狭さ以外の躓きの除去；⑤人々のいる場所に近づく事を挙げている。更に、⑥受肉的な奉仕の在り方；⑦礼拝の視覚化；⑧真の交わりの形成；⑨明け広げの態度で群を導く事、を挙げている。それに加えて、⑨裾野を広げる伝道；⑩聖書を共に学ぶ；⑪スモールグループの活用；⑫魅力ある礼拝の場；⑬子供達・青年達への伝道と育成；⑭遠心的伝道への方向転換；⑮狭いマイ・チャーチイズムの克服；⑯国内伝道と国外宣教の二元論からの脱却、を挙げたい。

4. ポストモダンにおける宣教の神学的理解

- **宣教の神学的理解**：「宣教の命令を、神の民にとって意味のあるもの、また動機づけを与えるものとして概念化する事」(グレーザー)が必要。世界宣教の「神学的理解」が求められている今日の状況とは①Globalization、②宣教活動の視野の拡大、③多くの社会問題、である。
- **宣教の定義の拡大**これらを踏まえつつ 21 世紀における宣教の理解と実践について提案したい第一は、宣教の定義の拡大である。「宣教とは、贖いの分野における神の支配的行動の一部であり…神のミッションであって、人のものではない。それは神の心から始められ、神の愛に基づき、神の御心によって定められたものである。…その成否は神の力による」(Kane)、提案の第二は、神の国の伝達の強調である。「宣教の正しい理解は、神の国、つまりイエスが宣告し、その時代に示された良き音信、に焦点付けられる」(Glasser)。神の国こそイエスが宣告し、示された良き音信である、神の国の到来を伝える中に伝道、教会建設は含まれるが、それに限定されず、人生と社会の全ての局面において社会正義の確立を目指す(Verkuy1)。1974 年のローザンヌ世界宣教国際会議では、伝道と社会・政治的関与はキリスト者の義務の両輪として認識された(ボッシュ 406)。③結論的に：福音の伝達が切先→教会形成→教会が社会において預言者的役割を果たす。